

## 錦鯉の輸出振興を支える新潟の伝統的手法

### Traditional Niigata Prefecture Methods Supporting Koi Export Promotion

○坂田 寧代\* 上野 雅幸\*\* 木村 優希\*\*  
SAKATA Yasuyo UENO Masayuki KIMURA Yuuki

#### 1. 研究の背景と目的

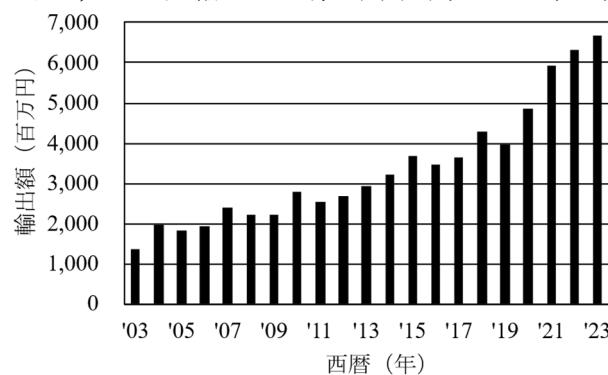
中山間地域に人が住み続けるためには、産業振興が欠かせない。長岡市山古志地区・小千谷市東山地区は日本有数の豪雪地帯でありながら、錦鯉発祥の地である強みを活かし、錦鯉の養殖業すなわち養鯉業が盛んに行われてきた。2004年新潟県中越地震では錦鯉を飼育する野池すなわち養鯉池が連鎖的に崩壊し、また、越冬ハウスの電気供給停止により貴重な親鯉をはじめとした錦鯉がへい死し、壊滅的な被害を受けた。その後、大規模経営体を中心に、山間部の養鯉池の復旧や平野部への越冬ハウスの再建、経営回復を果たしてきた。コロナ禍や中国への輸出停止などの困難に直面しつつも、2022年に国の農産物の輸出重点品目に追加されている。

本報では、新たな基本法の柱である「農村の振興」を実現するための産業振興の一例を養鯉業に求め、コロナ禍以降の情勢変化を示すとともに、その両輪として豪雪中山間地の地域振興が重要であることを述べる。

#### 2. 輸出重点品目・錦鯉の新潟の伝統的手法

錦鯉等の輸出金額の推移からは、中越地震以降の増加傾向がみてとれる（図-1）。直近5年間、コロナ禍でも輸出金額を伸ばしている。新潟県産農林水産物の輸出金額推移をみても、米どころ・新潟のイメージの米よりも錦鯉は多い輸出金額を誇っている（図-2）。

国としても新潟県としても重要な輸出農産物に位置付けられる新潟の錦鯉だが、広島県の大規模養鯉業者の戦略的経営や、他国での生産技術移転によってその地位は安泰ではない。例えば、広島の大規模養鯉業者は、コンクリート池での泉水飼育により、品評会やオークションに照準を合わせて出品作を完成させ、2億円に及ぶ高額落札を成功させるなどしている。一方、新潟県の飼育方法は、非積雪期は山間部の養鯉池で飼育し、積雪期は越冬ハウスで飼育するのが主流であり、平野部のコンクリート池での泉水飼育に力を入れる養鯉業者は資金力のある大規模経

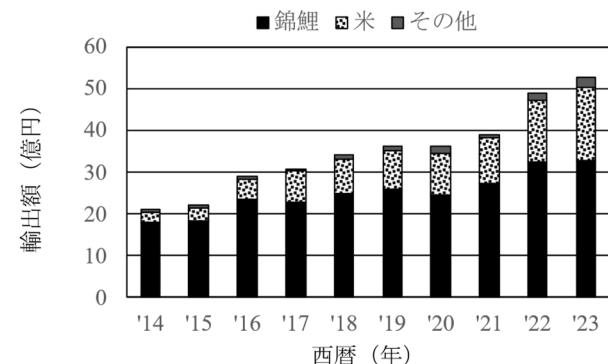


注1) 水産庁<sup>1)</sup>をもとに作成。

注2) 2018年までは「観賞魚（金魚を除く）」、それ以降は「観賞魚こい」の値。

図-1 錦鯉等の輸出額の推移<sup>注1) 注2)</sup>

Exports of Koi and other products



注) 新潟県農林水産部<sup>2)</sup>をもとに作成。

図-2 新潟県産農林水産物の輸出額の推移  
Export of agricultural, forestry and fishery products from

\*新潟大学自然科学系 Institute of Science and Technology, Niigata University,

\*\*元 新潟大学農学部 Former Faculty of Agriculture, Niigata University

キーワード：輸出重点品目、錦鯉、中山間地域

當体に限られている。

豪雪は不利な要素と受け止められがちだが、錦鯉の飼育に重要な役割を果たしている。積雪を利用した天水池での大型成魚の飼育は、清浄な雪解け水と静穏な環境、何より、コイヘルペスなどの感染症の恐れがない点で新潟県の錦鯉生産を支える伝統的手法といえる<sup>3)</sup>。この天水池の手法を編み出した小千谷の先駆的養鯉場では、泉水飼育や色揚げ

飼料などの各種技術が発展した現在でも天水池での飼育にこだわっているという。その業者によると、新潟の伝統的な錦鯉の特長は、姿勢がよく丈夫な鯉であることが第一だという。顧客が購入したあとすぐに死んでしまうような鯉は論外である。また、紅は紅でも真っ赤な紅ではなく奥ゆかしい紅を目指しているとのことである。近年の品評会では、「姿勢 50%，質 30%，模様 20%」という従来の評価基準が「模様 50%，質 30%，姿勢 20%」と逆転してわかりやすさが重視されたり、豊満な体躯が評価されたりしているという。こうした趨勢の中でも山間部の養鯉池、とくに、積雪を活かした天水池での飼育は、新潟の象徴でもある。

### 3. 品種の多様性と輸出ネットワーク

一方、豪雪地ならではの相互扶助に支えられた輸出ネットワークの存在も明らかになった(図-3)。輸出を行えるのは認定を受けた養鯉業者のみだが、ある程度の資金力がなければ認定養鯉業者となるのは難しいため、中小規模の養鯉業者は輸出可能な大規模養鯉業者とつながりをもつことによって、輸出を可能としている。大規模養鯉業者にとっては、例えば、「いぶし銀のおじいさんしかつくれない鯉」の品揃えが可能となるため、両者にとって利のある仕組みといえる。こうした大規模養鯉業を中心としたネットワークが、山古志で最も養鯉業が盛んなM集落には、少なくとも3つ存在していることがわかった。

このほかにも、「山古志・小千谷に行けば、なんでも揃う」というような品揃えの豊富さはバイヤーにとって魅力となっている。先述の養鯉業者は全日本錦鯉振興会の理事長の際に「一つの業者に一つの看板商品をつくれば食いっぱぐれない」と奨励したという。これらの品種の多様性・輸出ネットワークの存在が、新潟の地位を強固なものにしている。

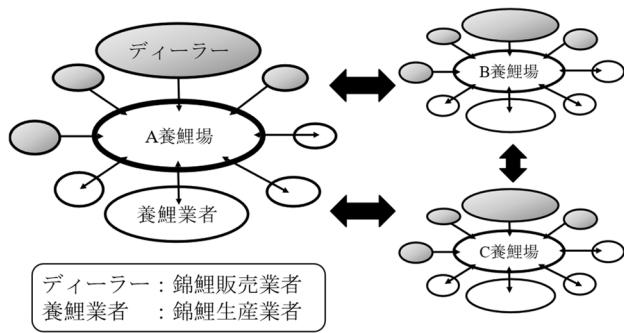
### 4. 豪雪中山間地の生活環境整備への期待

豪雪中山間地の強みを活かした錦鯉生産が継続されるよう、豪雪による春先の倒木除去作業や養鯉池の造成に対する養鯉業振興への行政支援だけでなく、住み続けられる農村であるよう、除雪等の豪雪対策や道路補修等の社会インフラ整備も不可欠である。

**謝辞** 地元養鯉業者、長岡市錦鯉養殖組合、長岡市の関係各位に大変お世話になりました。また、新潟大学錦鯉学センターの代表・長谷川英夫教授にご協力頂きました。御礼申し上げます。なお、本研究の一部は、JSPS 科研費JP24K09123 の研究助成を受けた。

#### 引用文献

- 1) 水産庁：内水面漁業・養殖業をめぐる状況、<https://www.jfa.maff.go.jp/j/enoki/attach/pdf/naisuimeninfo-36.pdf>
- 2) 新潟県農林水産部：令和5年度県産農林水産物の輸出実績を取りまとめました、[https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/life/674572\\_2014533\\_misc.pdf](https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/life/674572_2014533_misc.pdf)
- 3) 坂田寧代、有田博之、森下一男、吉川夏樹：中越地域における養鯉池の立地変遷と水利用技術、農業農村工学会論文集 276, pp.37-44 (2011)



注) 聞取りをもとに作成。

図-3 M 集落内に存在する輸出ネットワーク

Export network existing in settlement M

注)

注)